

たぬき

小川三郎

たぬきに旅立ちを見送られる、たぬきは、
仏様なのだという、そう祖母がいう。
祖母もまた、たぬきなのである。
笑いかたとか怒りかたが、そうなのである。
あちらこちらにさりげなくたぬきはいて、
なにかと私に声をかける。

きつねは声をかけてこない。
それどころか見掛けもしない。
だけど必ずいるそうさ。
どちらがどれだけのいのか知らない。
いたちやねずみに比べれば、
大してずるくないのかもしれない。

私の笑いかたも時折たぬきになる。
宇宙のことが頭の片隅にあると、
そうなるのである。
別に宇宙に行きたいわけではない、宇宙は、
街のあちこちにあつて、私が思うのはそちらである。
古来よりたぬきは、
宇宙を造るのが得意だったから、

私もそこでは身が軽くなる。
笑いかたもたぬきになる。

きつねはもっと現実主義だな、
あれは踊りがうまいに過ぎない。
それもかなり羨ましいけれど。
踊りというのは嘘だから、嘘は嫌いじゃないけれど、
たぬきは嘘をつかないんだ。
ただ、宇宙の話
しているだけ。

祖母も嘘はつかなかつた。
両親や姉はたぬきじゃなかつた。
彼らは私が嘘つきだというが、
どのみち彼らカラスだから、
とうてい分かり合えなどしない。

水面に映った自分の顔を、
見つめてしばらくぼんやりとする。
たぬきだから、実物よりもこつちがすてきた。
自然と半分半分がすてきた。
そうして化けて、昔はいい思いをしたという。
そういう業は、今ではすっかりなくなつたけれど、
街中で私には名前がない、たぬきだ。
アイスクリームと宇宙が好きだ。

呪文を唱えて、どんどん長生きする。
祖母はもう200歳
私ももう、120歳
両親よりも年上になつた。

カラスはごみばかり食べているから、
たくましいけど寿命が短い。
綺麗な服はたぬきに任せろ。
きつねほどじゃないけれど。
かわいい女もたぬきに任せろ。
行列をするのはいたちが得意だ。
たばこをゆつくりくゆらす姿は、
やっぱりたぬきが、
さまになる。

詩集『ゴルドスリーブ』から

灰皿町吸殻山101（小川三郎）